

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01339

研究課題名（和文）イギリス宗教改革と「プロテスタント国家」再考 イギリスの統合と分離の淵源を探る

研究課題名（英文）The Protestant State reconsidered: Study of The Reformation as the origins of integration and separation of the British State

研究代表者

山本 信太郎（Yamamoto, Shintaro）

神奈川大学・国際日本学部・教授

研究者番号：10645344

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題は、16世紀に端を発する「イギリス宗教改革」の過程と、その後近世・近代を通して形成され、現在に至っている「プロテスタント国家イギリス」のありようの関係を探ることであった。そのような課題を、山本はウェールズの視点から、小林と富田はスコットランドの視点から、岩井・那須・穴井は17世紀中葉のいわゆるピューリタン革命における宗教の観点から、後藤はカトリック・レキユザントの観点から、井内は近世の船乗りの信仰実践の観点からそれぞれ追求し、指がそれらを総合した「プロテスタント国家」神話の再検討を行い、課題の問いに答えうる一定の歴史像を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって到達し得た成果は、研究課題の副題でもある「イギリスの統合と分離の淵源を探る」ことでもある。イギリスは21世紀に入ってEUからの離脱（ブレグジット）を経験したが、それは16世紀に普遍的なヨーロッパ・キリスト教世界からのイングランド国教会の離脱にも擬えられる。本研究は特異な政教関係を有する「プロテスタント国家イギリス」形成の歴史的なありようを明らかにすることによって、歴史学におけるイギリス宗教改革の意義を捉え直しただけでなく、ヨーロッパにおけるイギリス国家の位置づけを考え直す手がかりを提供することが出来たと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project was to explore the relationship between the process of the Reformation of Britain, which originated in the 16th century, and the state of the Protestant Britain that was subsequently formed throughout the early modern and modern periods and has continued to the present day. Yamamoto pursued such issues from a Welsh perspective, Kobayashi and Tomita from a Scottish perspective, Iwai, Nasu and Anai from the perspective of religion in the so-called Puritan Revolution of the mid-17th century, Goto from the perspective of Catholic recusants, and Inai from the perspective of the religious practices of early modern sailors, while Sashi synthesised them into a historical image of Protestant nation. The myth of the historical image of Protestant nation was re-examined and a certain historical image was constructed that could answer the question of the issue.

研究分野：近世イギリス史、イングランド宗教改革とウェールズ

キーワード：イギリス プリテン 宗教改革 プロテスタント国家 ウェールズ スコットランド ピューリタン革命 船乗り

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景とそれに対する問いとなるのは次の3つであった。

(1) 「長期の宗教改革」を超えて

イングランドでの宗教改革を、16世紀だけに限定せず、より長期的な視点で把握しようという試みは、これまでも、「長期の宗教改革」として、イギリスの学界でもすでに提唱されている。しかし、それらの研究の多くは、文字通り「教義」や「教会」がどのように改革されたか、という側面にもっぱら焦点が当てられ、旧来の伝統的な教会史・宗教史の問題設定にとどまっている。宗教改革がもたらした影響は、単に教会組織や宗教思想だけではなく、R・H・トーニーやM・ウェーバーの古典的研究を挙げるまでもなく、国制や経済とも密接な関係を持ち、さらには、L・コリーの研究が先鞭を付けたように、国民意識の醸成など、単なる宗教思想を超えた、より広範な人々の意識の問題にまで関わるものであった。

本研究では、「長期の宗教改革」が提起した問題を継承しつつ、その議論を発展させ、イギリスという国家それ自体のあり方（「プロテスタント国家」という自己認識）を規定した要因としての宗教改革の重要性を明らかにする。また、議論の対象を宗教改革と内戦期に集中させることで、近代イギリス社会と宗教改革の関係についての新しい歴史像を提示しようとした。

(2) 構築物（フィクション）としての「プロテスタント国家」

従来、「近代イギリス＝プロテスタント国家」という枠組みが自明の前提とされてきたが、その妥当性を再検証する必要がある。そうした自己規定が、いつ、どのように形成され、維持されてきたかについては、あまり研究がなされてこなかった。それは、従来、イングランドの宗教改革が、すでに国民の間に浸透していた反カトリック意識に基づいた自発的な運動と理解されてきたからである。しかし、修正論に基づく近年の研究は、前提となる宗教改革期における民衆へのプロテスタント信仰の浸透を否定しており、プロテスタント国民としての意識の形成過程を改めて明らかにする必要がある。

例えば、メアリ1世治世を対象とした研究の中で、メアリに対する後世の否定的な評価の根底には、エリザベス治世をプロテスタント国家の完成形として無条件に肯定する歴史観があることが指摘されている。いわば、エリザベス時代を判断基準（規範）として、歴史の評価が下されてきたのである。しかし、修正論以降の研究では、メアリ時代の宗教政策は当時の民衆の宗教意識に反するものではなかったことが明らかになっており、一方的な評価の妥当性に疑問が出されている。さらに、近年、ステュアート朝初期においても、メアリ治世をことさらに否定する状況ではなかったことも指摘されている。すなわち、プロテスタント国家という意識は、たえず形成途上であったことになり、プロテスタントの守護者としてエリザベスを神話化する歴史理解、すなわち、実態とは乖離した「フィクションとしてのプロテスタント国家」という自己認識が確立されてゆくプロセスの解明が重要な課題として挙げられた。

(3) 「ブリテン複合国家」と長い宗教改革

本研究の重要な特徴は、「宗教改革」や「プロテスタント国家」の問題を、テューダー史の中で完結させず、17世紀の革命期まで射程を広げ、地域も、1530年代にイングランドと合同したウェールズや、17世紀に入ってイングランドと同君連合を組むことになるスコットランドにまで広げ、ブリテン島全体を対象としたことである。宗教改革によって、プロテスタンティズムがイギリスに順調に定着したとする旧来説を批判し、16世紀における伝統的信仰やカトリック信仰の残存を強調した修正論が「定説」となって以降、宗教改革とピューリタンによる共和政を頂点とする17世紀の内戦時の宗教状況とを整合的に連続する過程として理解することが困難になっている。つまり、かつて一連の歴史過程として、発展的に理解されていた宗教改革とピューリタン革命の間に、大きな歴史理解の齟齬が生じている。

17世紀の内戦・革命が、プロテスタントの大義をめぐる戦いとして同時代人たちに認識されていたことは、今日も多くの歴史家が認めている。当然、歴史的に構築された自己認識としての「プロテスタント国家」がどのように17世紀以降のイギリスの政治的現実となり、さらに大規模な軍事衝突を伴うエネルギーとなり得たのかを、緻密かつ多角的に解明してゆく必要がある。このことは、イングランドのみを対象とする研究では達成することはできない。1603年のジェームズ1世（6世）即位から同君連合の関係に入ったスコットランドはもちろん、一般には順調なプロテスタント化が見られたとされるウェールズと宗教改革実施の困難が大きかったとされるアイルランドの比較を含めた「ブリテン国家」の宗教改革という、より包括的な問題設定が必要となる。本課題は、異なった宗教基盤を持つ複合的な国家において、宗教改革の成果への理解が、どのように位置づけられ、複合国家の維持にどういった役割を果たしたのかを解明する。近世イギリスを「ブリテン国家」として捉える研究は、17世紀のピューリタン革命を考察するさいに有効な視座として定着しつつあるが、宗教改革との関係、とくに上記のような（フィクションを含む）「プロテスタント国家」という意識との関わりでの検証はまだ本格的になされていない。

これら近年の宗教改革史に関わる研究の動向からも明らかなように、16世紀と17世紀における政治・宗教・社会の状況に関する研究が描き出す歴史像は、各々異なったベクトルで展開し、それぞれ重要な成果を得たが、一方で、相互の整合性を欠き、矛盾をもはらむものとなっている。宗教改革とピューリタン革命が近代社会誕生の重要なポイントであるならば、これらを統合する新たな歴史像の構築が必要であることが指摘された。

2. 研究の目的

本研究では、旧来の宗教史のような宗教思想の改革や教会組織改革の経過の考察にとどまらず、行財政史や国民意識、歴史認識といった側面において宗教改革が与えた影響を解明して宗教改革の実相を明らかにし、さらに、後世におけるエリザベス1世の治世評価に見られるような、実際とは異なる理想化・神話化された「フィクションとしての」宗教改革像が、17世紀の内乱期を中心とする、その後の時代の政治や国民の意識の有り様にどのように作用したのかを考察する。現実とフィクションの両面から宗教改革を取り上げることで、領域的にも時間的にも、より大きな枠組みの中で、宗教改革という事象が、その後の「プロテスタント国家」としてのイギリスの歴史展開に果たした役割やその重要性を考察する。それは、これまでのプロテスタントイデオロギズムと近代社会を、イギリスの事例を媒介させて結びつけてきた歴史理解の再検討にもつながる大きな問題である。

上述のように、修正論の隆盛以降、分離している宗教改革史研究とピューリタン革命史研究の新たな結合と整合性のある歴史像の確立は、まだ手つかずの領域であり、新しいイギリス史叙述を実現するためには不可欠な課題である。また、「プロテスタント国家」という概念を、虚実両面から考察するといった視点は、イギリスでの研究動向にはあまり見られないものであり、近代イギリス国家を支えた根幹とされてきた「プロテスタント性」の内実を再検討するという点で、貴重な貢献になることは間違いない。さらにはブリテン複合国家における宗教改革を包括的に考えようとする議論は、イギリスの学会でもまだ緒に就いたばかりであり、日本での紹介も乏しい。その面からの貢献も、本研究の独自性として強調されるであろう。

3. 研究の方法

上記のような本研究の背景・目的を踏まえて、共同研究メンバーが個々に課題を設定し、現地イギリスでの史資料調査・文献収集を行い、情報を交換して総合的な歴史像の構築に努めた。ただし、プロジェクトの開始が世界的なパンデミックであるコロナの猛威の始まりと重なったため、実際の史資料調査などは共同研究期間の後半に集中的に行われた。なお、情報を交換し、課題の再調整を行うための研究会は以下の通りに開催された。

- (1) 2020年8月2日 zoomにて開催
- (2) 2021年11月8日 神奈川大学みなとみらいキャンパスにて開催
- (3) 2023年1月21日 神奈川大学みなとみらいキャンパスにて開催
- (4) 2024年2月22日 神奈川大学みなとみらいキャンパスにて開催

4. 研究成果

すでに述べたように本研究の期間はコロナ禍が猛威を奮った時期に重なったため、研究の進捗状況に関してはたびたび困難な局面を経験したが、当初掲げられた課題についてはおおむね達成された考えられる。

「(1)「長期の宗教改革」を超えて」については、特に近世を長い射程で見通した論考が共同研究のメンバーによって執筆されるとともに、特に一般的に認識される16世紀の宗教改革史研究だけではなく、17世紀中葉のいわゆるピューリタン革命における様々な宗教的局面を問題とした研究が宗教改革との関連で追及されたことによって、従来の「長期の宗教改革」論を超えた新しい宗教改革像が構築された。

「(2)構築物(フィクション)としての「プロテスタント国家」の再検討は、研究の背景で挙げられた3つの課題のうち最も困難な課題であったが、個々の研究の中で、そもそも「宗教改革」という言説がどのように扱われ、どのような眼差しを向けられたかという、ある意味ではメタなレベルでの宗教改革理解を推し進めたことにより、一定程度の解明がなされたと考えられる。

「(3)「ブリテン複合国家」と長い宗教改革」については、ウェールズやスコットランドでの宗教改革にかかわる個別で豊富な事例についての研究が蓄積されたことによって、「ブリテンの宗教改革」と呼ぶべき全体の歴史像と、それらの個々の事例における共通点と差異がまとまった形で明らかにされたと考えられる。今後の課題は、ブリテン島(イングランド、スコットランド、ウェールズ)で起こった宗教的实践や変容の問題を、アイルランドの歴史的な経験ともすり合わせながら語り直すことであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 那須敬	4. 巻 1041
2. 論文標題 イギリス革命と流神	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井内太郎	4. 巻 312
2. 論文標題 16世紀イングランドの船乗りと海事共同体	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井内太郎	4. 巻 315
2. 論文標題 16世紀イングランドの船員たちと船上文化～かれらの経済活動の分析を中心として～	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 26-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 井内太郎	4. 巻 316
2. 論文標題 16世紀イングランドの大航海時代と船員の語り～ W. ブラウンの船上遺言書を手がかりとして～	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井内太郎	4. 巻 50
2. 論文標題 16世紀後半期イングランドのギニア交易～W.タワソンの「航海日誌」からみる航海・交易・貿易商人社会～	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋史学報	6. 最初と最後の頁 153-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩井淳	4. 巻 19
2. 論文標題 「歴史総合」と時代区分 アイルランド史と台湾史から問う	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 メトロポリタン史学	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井淳	4. 巻 17
2. 論文標題 英米のビューリタニズムとコモンウェルス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ビューリタニズム研究	6. 最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林麻衣子	4. 巻 124
2. 論文標題 16・17世紀スコットランドにおける複合アイデンティティに関する一考察 Scoto-Britannus作品一覧	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 防衛大学校紀要	6. 最初と最後の頁 23 - 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 指昭博	4. 巻 8
2. 論文標題 コメント 18世紀における女性・旅・出版	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6. 最初と最後の頁 28-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.50827/jwhn.8.0_28	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 指昭博	4. 巻 74
2. 論文標題 服従と妥協のイングランド宗教改革 研究回顧と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸大論叢	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本信太郎	4. 巻 29
2. 論文標題 イングランド宗教改革と大学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学史研究	6. 最初と最後の頁 2-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本信太郎	4. 巻 64
2. 論文標題 イングランド宗教改革とウェールズ辺境評議会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学研究所報	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩井淳	4. 巻 840
2. 論文標題 今井宏『イギリス革命の政治過程』 「宮廷」対「地方」論の意義と限界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 穴井佑	4. 巻 992
2. 論文標題 イングランド革命期の教区社会における教会規権論と聖餐式: ノリッジのセント・ピーター・マンロフトを事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 指昭博	4. 巻 836
2. 論文標題 イギリスのEU離脱と「グローバル化」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 兵庫教育	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩井淳	4. 巻 22
2. 論文標題 The State of History Education in Local Universities: The Case of Shizuoka University	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア太平洋論叢	6. 最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 11件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 山本信太郎
2. 発表標題 ウェールズ語聖書の誕生とウィリアム・モーガン
3. 学会等名 日本ケルト学会東京研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本信太郎
2. 発表標題 ウェールズの歴史から見るイギリスの宗教と文化
3. 学会等名 第43回東海中学高校サタデープログラム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山本信太郎
2. 発表標題 近世ウェールズにおけるウェールズ語聖書普及の社会史的考察に向けて
3. 学会等名 日本ケルト学会第43回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 那須敬
2. 発表標題 イギリス革命と洗神
3. 学会等名 2023年度歴史学研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井内太郎
2. 発表標題 16世紀後半期イングランドのギニア交易～W.タワソンの「航海日誌」からみる航海・交易・貿易商人社会～
3. 学会等名 三田史学会大会西洋史部会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井内太郎
2. 発表標題 大航海時代イングランドの船乗りの社会史～その虚像と実像～
3. 学会等名 中国四国歴史学地理学協会大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井内太郎
2. 発表標題 大航海時代イングランドの船乗りの社会史～その虚像と実像～
3. 学会等名 広島西洋史学研究会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 宗教的多様性から問い直すイギリス史
3. 学会等名 第43回東海中学高校サタデープログラム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 英米のピューリタニズムとコモンウェルス
3. 学会等名 藤女子大学キリスト教文化研究所 研究例会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Jun Iwai
2. 発表標題 Relativising Periodisation: History Education, "Passive Periodisation", and Composite States
3. 学会等名 British East-Asian Conference of Historians (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 「歴史総合」と時代区分 アイルランド史と台湾史から問う
3. 学会等名 メトロポリタン史学会大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 英米のピューリタニズムとコモンウェルス
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 近世史から「歴史総合」を考える
3. 学会等名 第41回東海中学高校サタデープログラム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 ブリテン近代史研究の3つの焦点 千年王国、複合国家、歴史教育
3. 学会等名 岩井淳先生退職記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 穴井佑
2. 発表標題 空位期の宗教改革史の正当性：教皇尊信罪から
3. 学会等名 近世イギリス史研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 後藤はる美
2. 発表標題 礫岩のような国家と近世的主権 17世紀イギリスの例から
3. 学会等名 日本西洋史学会第71回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井内太郎
2. 発表標題 16世紀イングランドの船乗りと海事共同体(Maritime Community)
3. 学会等名 広島史學研究会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤はる美
2. 発表標題 Print, Law and Public Sphere in Early Modern Britain and Ireland: Oliver Plunkett and the Trial by Jury, 1680-81
3. 学会等名 Early Modern History Seminar (Trinity College Dublin)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 佐川 英治	4. 発行年 2023年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 248
3. 書名 君主号と歴史世界	

1. 著者名 岩井淳・道重一郎編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 複合国家イギリスの地域と紐帯	

1. 著者名 岩井淳・山崎耕一編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 352
3. 書名 比較革命史の新地平 イギリス革命・フランス革命・明治維新	

1. 著者名 春田直紀、新井由紀夫、D.Roffe編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 580
3. 書名 歴史的世界へのアプローチ	

1. 著者名 堀越宏一編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 404
3. 書名 侠の歴史 西洋編 下	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	後藤 はる美 (Goto Harumi) (00540379)	東京大学・総合文化研究科・准教授 (32663)	
研究分担者	小林 麻衣子 (Kobayashi Maiko) (20440109)	防衛大学校(総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工学群)・人文社会科学群・教授 (82723)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	那須 敬 (Nasu Kei) (40338281)	国際基督教大学・教養学部・教授 (32615)	
研究分担者	井内 太郎 (Inai Taro) (50193537)	広島大学・人間社会科学研究科(文)・教授 (15401)	
研究分担者	岩井 淳 (Iwai Jun) (70201944)	静岡大学・人文社会科学部・名誉教授 (13801)	
研究分担者	穴井 佑 (Anai Tasuku) (70869403)	大阪経済法科大学・経済学部・准教授 (34427)	
研究分担者	富田 理恵 (Tomita Rie) (80322543)	東海学院大学・人間関係学部・准教授(移行) (33705)	
研究分担者	指 昭博 (Sashi Akihiro) (90196197)	神戸市外国語大学・外国学研究所・名誉教授 (24501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関